



すべての人たちは多かれ少なかれ人生の岐路に立つ。その進路を自らの意思で選べる時、人は迷うのだと思う。今までで人生の大きな岐路に立ったことは3回あった。

1つ目は大学時代に当時のセルビア・コソボ自治州での復興支援活動への参加決断だ。コソボ紛争後、難民を助ける会のスタッフとして3カ月間現地に赴任した。人間のたくましさや残虐さを知り、ニュースが現実であることを感じ、そして世界を感じた。その時私は日本に居ても、目は世界を向いていた。

2つ目は、証券会社に入社、3年間の営業経験の後、退社したことだ。そこでは営業の厳しさを知り、金融機関の理想と現実のギャップを感じ、そして自分の無能さを悟った。退職後、私は26歳から公認会計士試験に挑戦した。

3つ目は早稲田大学大学院会計研究科に入学したことだ。今は会計の面白さを学んでいる。もちろん在学中に公認会計士試験合格も勝ち取った。そして何より将来を同じ業界生きる仲間を得た。

岐路に立ったとき、私もみなと同様に迷った。どの道が正しいのか、他にもっと道はないのか、と。しかし今はどんな岐路に立とうがそれ程迷いは生じないだろう。なぜなら選んだ道でがむしゃらに頑張ることが、その道を選んだ自分を正当化してくれることを知っているからである。

今、岐路に立っている人は迷い抜けばいい。そして一度道を選択したならば、その道突き進むのみだ。どの道を選ぼうがその道が正しかったと言えるかどうかは自分次第だ。

このような考えは私の人生の軸になっている。そして人にはさまざまな軸があると思う。だから私の考え方が全てでは決していない。しかし、人に強烈な軸を感じる時、その人の人生の裏側には、がむしゃらさを感じるのも事実なのである。「我武者羅」・「一生懸命」、使い古された言葉だけど素晴らしい言葉だとオリンピックを見ながら思う。



▲コソボにて現地スタッフと(右端が筆者)



▲会計研究科の仲間と先生を囲んで(前列右端が筆者)

認識と測定をめぐるディスカッション 「会計実務ワークショップ」

企業会計は、企業の経済活動を数値と言葉で表現し、企業の活動の成果を株主や投資家等に対して報告する役割を持っている。しかしながら、企業が自社の経営状態をより良く見せようとして偽りの内容を報告してしまうことで、時には粉飾決算が起り、投資家等が大損害を被ることがある。なぜ、こうした事件が起ってしまうのだろうか。多くの原因があるが、一つには、企業会計の性質上、「見積もり」や「評価」といった主観的な判断を避けて通ることができないためである。そこで、これらの判断方法を具体的に定めるべく、わが国においては、企業の経営成績を具体的に計算し正しく報告する方法としての企業会計の基準と、報告される情報が適正であることを保証するための会計監査の基準が設けられている。



▲会計研究科 持永勇一教授



▲ケーススタディの様子(右端が筆者)

しかし、会計実務は日々複雑化しているため、実際の企業の現場では、こうした判断をめぐって、わが国の会計基準が制定された当初は想定し得なかった難しい事例が頻発している。このワークショップでは、そうした「白黒つけがたい」多くの事例に基づいたテーマを取り上げ、毎回異なる小グループに分かれてディスカッションを重ねる。主張のスタンスを明らかにするため、企業の管理職、監査する公認会計士、アナリスト等の役割を与え、責任ある主張が求められる非常に実践的な授業である。

企業の実務慣行を熟知し、会計監査の最前線に携わる持永先生の講評と鋭い指摘は、資本市場と金融行政の在り方から日本再生論まで及び、職業人として求められる思考力の鍛錬の場となる。また、将来、私たち会計研究科の学生が、会計専門家として実務に従事することを考えたときに、思考過程に関する事前準備としての安心感も得ることができる。

一石二鳥 小林啓孝 (会計研究科教授・研究科長)

会計人コ ス(中央経済社)  
 2008 November, 掲載

人生では、やりたいことは多くても、私たちが使える時間は限られています。この限られた時間をどううまく使うかが問題になります。冒頭にあげた言葉は、「範囲の経済」を目指すと言い換えてもかまいません。投入した資源(時間など)が二重、三重に役立つようにするにはどうしたらよいかを考えながら、資源の使い方を工夫したらよいのではないかと思います。たとえば、わたしの場合、統計学と数学は英語のテキストで勉強しました。

受験勉強という側面に限ると、なるべく楽をして(覚えることを少なく、計算練習を少なく)、応用力を高めるにはどうしたらよいかを考えながら勉強をしていったらよいのではないかと思います。私の公認会計士二次試験受験の場合は、理論構造を把握することと問題をパターン化することを主眼に勉強しました。1年くらいかけてノートに代表的なパターンの問題を収集して、論理の展開やパターンごとの解き方のプロセスを把握した後、試験前の数ヶ月で、ノート等で論理展開と計算プロセスを確認し、計算の勘が衰えない程度に計算をやりました。割合と楽な受験勉強だった記憶があります。

旋律



早稲田大学大学院会計研究科教授 小林啓孝

一石二鳥

人生では、やりたいことは多くても、私たちが使える時間は限られています。この限られた時間をどううまく使うかが問題になります。冒頭にあげた言葉は、「範囲の経済」を目指すと言い換えてもかまいません。投入した資源(時間など)が二重、三重に役立つようにするにはどうしたらよいかを考えながら、資源の使い方を工夫したらよいのではないかと思います。たとえば、わたしの場合、統計学と数学は英語のテキストで勉強しました。

受験勉強という側面に限ると、なるべく楽をして(覚えることを少なく、計算練習を少なく)、応用力を高めるにはどうしたらよいかを考えながら勉強をしていったらよいのではないかと思います。私の公認会計士二次試験受験の場合は、理論構造を把握することと問題をパターン化することを主眼に勉強しました。1年くらいかけてノートに代表的なパターン

2008年度 留学生合同懇談会  
 (商学部・商学研究科・会計研究科)

10月15日(水)に、レストラン西北の風にて留学生合同懇談会が開催されました。本研究科から参加した4名の留学生と、商学学院内他箇所の留学生が延べ100名集まり、先生方や職員を交えて、楽しく懇談のひとつを過ごしました。

▼右:国際会計専門コース1年  
 タンヤビーンチャルムボンさん  
 中央:科目等履修生 フルケン・シルビアさん



▲写真中央  
 長谷川哲嘉先生



▲会計専門コース1年  
 チェ・ワッタナさん  
 鄭岑(テイ・シン)さん



## 第17回租税資料館賞 租税資料館奨励賞の部 本研究科修了生2名が受賞



村上 裕樹 (会計研究科 第二期生)

標題:「確定決算基準の今日的課題」

### 租税資料館賞受賞にあたって

最初にこの場をお借りして、論文を完成させるにあたり、親身に指導して下さった品川先生には感謝申し上げます。お正月を返上してまで指導して下さった先生には頭の上がらぬ思いです。また、ご迷惑をおかけしてしまった、先生方、事務所の方々、そして、品川先生の下で一年間論文に取り組んできた同期、大学院に出してくれた両親には感謝の気持ちで一杯です。

このような賞を、受賞させていただけるのは夢のようですが、最後まであきらめず論文を完成させることができ本当に良かったです。また、この論文作成が、公認会計士試験の試験科目である租税法の理論の勉強になり、試験で役立ったのも、後から考えてみると、論文を書いて良かった点だと思います。

### 会計研究科の皆さんへ

私が、最初に論文を書こうと思ったきっかけは、会計以外の知識を身に付けたかったからです。公認会計試験に合格することは、もちろん一番の目標でしたが、会計研究科に在学しているからには会計以外の知識も身につけて、社会に出たいと考えました。

早稲田大学の会計研究科は「会計プラス1」を掲げています。私は税金を選びましたが、ITやコンサルティング、英語等会計以外にも様々な勉強ができます。実際に実務についてから、働きながら勉強するのは労力のいることです。在学生の皆さんは2年間あるので、大学院をフルに活用して、貪欲に知識を吸収してもらえたら良いと思います。

入学を考えている方がもし見ていらしたら、ぜひ会計研究科に入学することをお勧めします。授業に関しては、すばらしい先生方がたくさんいますし、授業内容も基礎レベルから実務に直結するような内容まであります。毎年会計研究科は進化し続けており、私が在学していた頃はなかった授業が毎年増えており、これから入学される方がうらやましいです(笑)そして何より、同じ目標の友人がたくさんできることが一番だと思います。一緒に勉強したり、遊んだりして苦楽を共にした経験は、何よりもの財産になるのではないのでしょうか。

長くなってしまいましたが、こうして賞を取ることができ、様々な経験を積めたのも、会計研究科に入ったことが大きなきっかけです。2年間という短い期間でしたが、入学して勉強することができて本当に良かったです。

平井 健之 (会計研究科 第二期生)

標題:「固定資産の減損に関する税務と会計の  
差異と調整」

### 租税資料館賞受賞にあたって

まず、最後まで丁寧に指導頂いた品川先生に感謝申し上げます。先生のご指導のお陰で、このような素晴らしい賞を受賞できました。論文の作成は、提出日当日、最後の最後まで苦労しました。その分先生にも相当なご迷惑をお掛けしました(笑)。

会計研究科の講義や会計士試験と平行しての論文作成であったため、今思い返してみると不十分な点も多くあったと思います。ただ、限られた時間の中ですが、一点に集中し、深く考察し、自分の意見を形成するという一連の作業は、とても貴重な経験となりました。今回の受賞を糧にして、今後の勉強に励んでいきたいと思っています。

### 会計研究科の皆さんへ

現在監査業務に従事していますが、約1年弱の実務経験から感じることは、会計研究科で学んだ租税法の知識が非常に有益なものとなっているということです。もちろんすべての講義が、直接的、間接的にという違いはあれ、有益なものとなっています。

会計監査をする上で、何よりもまず会計学や監査論の知識が必要になりますが、随所で税法の影響を考慮しないといけない場面が出てきます。その際、条文やさらには通達まで当たらないといけないケースもあります。単純で馬鹿馬鹿しい話ですが、日頃から会計研究科の講義で税法の条文に触れていれば、それ自体が業務に有益なことになると思います。

会計士試験を受けられる方だけでなく、一般の企業に進まれる方にとっても、税法は重要な分野です。会計研究科の講義を積極的に利用する(出席するだけではダメです)ことは、会計研究科の皆さんにとって、将来必ずや活かされるものだと思っています。

2008年11月7日  
授賞式にて品川先生と  
(リーガロイヤルホテル東京)



租税資料館賞とは、財団法人租税資料館が、税法学ならびに税法と関連の深い学術の研究を助成するため、税法等に関する優れた著書及び論文に対して、毎年表彰を行い、賞金を贈呈するものです。大学院生の論文には租税資料館奨励賞が設けられています。